

博士論文の要約

氏名 新海 拓郎

論文題目 奈良県大和郡山の金魚養殖をめぐる民俗誌—養殖池・生産技術・販売と流通—

養殖業は第二次世界大戦後に飛躍的な発展を遂げ、近年では水産物の安定供給や資源保護の観点から、水産業の中で養殖業の重要性が増大してきている。養殖対象種の拡大、生産量も増加する傾向にある。養殖の起源は紀元前にまで遡り、世界中で最も古い記録は紀元前3世紀に范蠡^{はんらい}の著した『養魚経』に記述されたコイの養殖であるとされる。その中でも、魚類の海面養殖は昭和3（1928）年のブリの養殖を契機として、養殖対象種は拡大し続けている。その為、養殖という活動は比較的新しい技術が使われる産業として捉えられることもあるが、一方で、黒鯉に代表される内水面養殖は伝統的に培われた技術が現在も継承されている。これまで生業研究の対象として扱われることが少なかった養殖業についても漁撈活動と同じく人間と環境や魚との密接な関わりがあるのではないかと考えられる。

養殖業を対象にした学術的研究には、ブリ、タイ、真珠、コンブ、ノリ、アユ、黒鯉、錦鯉、そして金魚などを対象にして国内において数多くの研究が蓄積されてきた。人文諸科学の中では地理学は他の分野よりも早くから養殖業に注目し、多くの研究の蓄積がなされてきた。地理学では養殖業の立地や産地形成について議論されてきた。さらに、特定の区画を占有する養殖業では養殖施設の形成する特有の景観についても注目されてきた。一方、これまで、民俗学や文化人類学における生業研究では自然を人間がどう利用するかという視点からの研究が多かった。漁撈活動については膨大な研究の蓄積はあるものの、養殖業（特に海面養殖業）は人との自然との関わりが希薄化している生業として扱われることが少なかった。

本研究では食用の魚種ではなく観賞用として生産が行われる金魚の養殖業に着目した。金魚の養殖は江戸時代に武士が副業で行って以来、現在まで続く伝統的な生業であり、先に挙げた魚種の中でも歴史が古いものである。金魚とは野生のフナを起源として観賞用に品種改良が行われてきた魚である。現在は一般家庭で広く愛玩されている。また、愛好家と呼ばれる人々は品評会に入賞する1匹の魚を育てあげていく。民俗学の分野では愛好家の金魚飼育に注目した飼育技術について、地理学では養殖産地の形成過程が主に論じられてきた。生業研究の中では獲る漁業が注目されがちであり、それに対して養殖業、とりわけ観賞魚の生産については等閑視されてきた背景がある。

そこで、本研究では金魚の養殖池、養殖業者の民俗技術、金魚の流通という観点から、金魚養殖という生業および人間と生き物の関係性である魚類のドメスティケーションに関して明らかにすることを目的とする。金魚を研究対象とすることによって、人が生き物を育てるという営為について観賞用という別の視点から考えてみたい。金魚の中でも、一般品種や高級品種の生産ではなく、廉価品種の和金の商業的な生産活動に着目した。そこで、調査対

象地として奈良県大和郡山市を設定した。大和郡山では平野内にあるため池を利用した和金の大量生産が現在の産地の大きな特色となっている。和金以外の中・高級品種も生産されているが、本研究では和金の大量生産に焦点を当てる。筆者は2018年1月から2019年10月まで調査地に住み込み、主に3軒の養殖業者への参与観察、古老4名からの聞き取り調査、金魚が売買されるセリの見学をメインに行ってきた。

その結果は以下の通りにまとめられる。序章、第Ⅰ部「生産活動の場としての池」（第一章、第二章）、第Ⅱ部「金魚生産の技術と民俗知」（第三章、第四章、第五章）、第Ⅲ部「金魚販売の技術」（第六章、第七章）、終章で構成される。

序章では研究の背景・目的・方法を記述し、本研究の立ち位置を明確にした。

第Ⅰ部では大和郡山の金魚養殖の特徴であるため池養殖について取り上げ、養殖業者が池をどのように使っているのか、ため池養殖がいかんして展開してきたのかを明らかにした。第一章では生産活動の基本を提示した上で、4軒の養殖業者の池の使い方を示した。そして、金魚池のみを利用する例と金魚池とため池の両方を利用する例に分かれ、それぞれ池の利用の仕方が異なっていた。第二章では養殖池の変遷について聞き取り調査を中心に議論した。大和郡山ではかつては水田、金魚池、ため池という多様な池が養殖に使われてきたが、現在は金魚池とため池が使われる。水田養魚の復元と衰退の理由、金魚池の類型化、ため池養殖の盛衰を明らかにした。

第Ⅱ部では産卵、孵化、水づくりという3つの技術を取り上げ、養殖業者が金魚の卵・仔稚魚や水環境をいかに管理しているのかを明らかにした。第三章では産卵の技術に注目し金魚池の事例とため池の事例を比較した。養殖業者のいずれにも共通しているのは、目的のサイズの魚を作るために、適正数の仔魚を池に入れることを最も重要視している点であった。第四章では様々な孵化の事例を取り上げてそれぞれの特徴を明らかにし、養殖業者の商業形態との関連から考察した。ため池と金魚池という池の特徴に合わせた採卵方式が選択されていることが明らかになった。第五章では水づくりという民俗技術に焦点を当てて、金魚池とため池での技術を比較した。まず、金魚の養殖には高密度飼養のために「青水」と呼ばれる植物プランクトンを増殖させた水が欠かせない。この青水の作り方（水づくり）の技術に金魚池とため池では違いが見られた。

第Ⅲ部では金魚の出荷活動とセリを取り上げて、金魚の市場名・販売形態・流通経路について明らかにする。第六章では和金類の市場名から民俗分類について議論した。和金類は大きさで用途が異なる為に大きさによって分類されてそれぞれに市場名が付けられている。流通する際には、大きさによる分類と年齢による基準という異なる2つの基準が存在することを明らかにした。第七章では金魚（主に和金類）の流通について議論した。セリで取り扱われる魚の約6割が和金であった。セリは生産調整の場、情報交換の場として機能していることも示された。

終章では、第Ⅰ部から第Ⅲ部までを総括して考察を行った。具体的には、ため池養殖を可能にした技術的側面を明らかにした。次に、品種、セリ、民俗技術の3点を他産地と比較

し、大和郡山の金魚養殖の特徴を明確化した。そして、大和郡山の金魚養殖業における人間と魚、人間と環境の関わりについての検討を行った。さらに、金魚養殖を事例として魚類の養殖とドメスティケーションの関連性についても議論を行った。